院長コラム

一緒に考えましょう
健康のこと
医療のこと
70

病院で死ぬということ

市民病院
院長　神谷里明

現在新型コロナウイルス感染症の拡大により病院や介護施設への家族の出入りが禁止されているか、厳しく制限されています。

最近日本では年間130万人余りの方が亡くなっていますが、病院で亡くなる方は約8割といわれています。最近は施設などで看取られる方も増えています。そのような状況の中、家族の面会を禁止または厳しく制限することにより、残り少ない時間を家族と過ごすことができない状態が続いています。確かに病院や施設内に感染症が広がるのは重大なことですので、その侵入を防ぐために出入りする人を制限するのは仕方がないことと思います。しかし、わずかに残された時間を1人で過ごさなければならないということはどうでしょうか。

現在ACP（アドバンス・ケア・プランニング）について色々話し合いなどが行われています。今後自分がどこで、どのように、誰と暮らしていきたいのかを家族などと話し合っておこうというものです。今病院で死ぬこと、または施設で看取ってもらうことを選択すれば、1人で孤独に過ごした末に、家族に見守られることなく亡くなるのを覚悟しなければなりません。これは仕方のないことなのでしょうか。そのような生き方を皆さんは望みますか。いつまで続くかわからないウイルスが蔓延する状況の中で、自分の生き方を覚悟を持って決めなければなりません。

まだコロナウイルスが収まりを見せない状況の中、いつまで病院、施設の人の出入りを禁止し続けなければならないのか。医療者としては「感染に対する危機感」と、「患者さんおよび家族への思い」との間で非常なジレンマを感じます。在宅での看取りを選択できれば、好きなときに家族と会えます。色々とそのための方策が考えられていますが、全ての人が在宅での看取りができるわけではありません。まだ病院、施設に入らざるを得ない人が圧倒的に多くいます。いつになったら会いたい時に会いたい人に会うことができるようになるのでしょうか。ワクチンの効果などによりコロナウイルス感染症が収束していくことを望んでいます。